

特集

語彙の 拡充アイデア

言語活動との関係を意識化させる 語句・語彙学習

千葉大学
安部 朋世

語句・語彙の学習をめぐる現状

外国語を学ぶ場合、学習者は対象言語の発音や文法とともに、語を一つ一つ覚えていかなければ、対象とする言語を理解したり表現したりすることができない。よって、学習する側にとっても指導の側にとっても、「語句・語彙の学習」の意義、すなわち、「対象とする言語を用いて表現・理解するための語句・語彙の学習」という意義は明確であろう。し

かし、母語を学ぶ場合、児童生徒はそれまでの日常の言語活動においてすでに一定数の語を獲得しており、学習場面で出会う「難語句」を除いて、語句・語彙の学習の必要性が認識されにくい。本稿の筆者が二年程前に大学生に対して行ったアンケートでは、「小中学校の国語の授業で語句・語彙についてどのような学習をしたか」という質問について、「ことわざ、故事成語、慣用句の暗記」「教科書に出てきた語の意味調べ」といった回答が多

くあり、具体的には、「辞書の早引き競争」「暗記して小テスト」といった印象において捉えられる傾向がみられた。五十人程の授業での簡略なアンケートではあるが、実際の国語の授業においては学習場面に応じた様々な言語活動との関連の中で語句・語彙の学習が行われていたとしても、学習者にとってそれは「辞書を引く」「普段使わないことわざ等の暗記」という完結された「語句・語彙の学習」として認識されており、言語生活につながっていく活きた言語活動との関係までは意識化されていないと考えられるのである。

類義関係と表現・理解

語句・語彙の学習においては、文章中に出てくる語がその文章の中でどのような意味を表すのかといった「読むこと」などの学習活動の中で行われる場合と、類義語や対義語を集めるといった、語そのものを対象として学習を行う場合とが考えられるが、後者の場合、学習者の側に、実際の言語活動との関連が見えにくくなることが多い。「類義語や対義語の学習が実際に読んだり話したりするときにどう活かしてくるのか」ということが学習者の側で意識化されなければ、その学習は、「語句・語彙のための学習」に止まってしまう。類義語学習の意義は、類義関係の語を集め

ることにより語の量的な知識を増やすことだけでなく、類義関係にある語の意味の違いを比較し把握することにより、語の意味理解を深めることにある(注1)。例えば、渡辺(一九七〇)は、「経験と言語との対応を、自覚的に認識する」方法として、類義語の対比による意義分析の有効性を述べている。「さむい」と「つめたい」はともに「低温」を表すことは共通するが、「さむい」は、「さむい朝・冬・国」といった用例が挙げられることから「直接の接触感覚を伴わずに感じる低温」、「つめたい」は、「つめたい氷・飲み物・ベッド」等々の例から「直接の接触感覚を伴って感じる低温」だとする分析ができる。このように、語の意味を「低温」「接触感覚の有無」といった要素、すなわち、その語の「意義特徴」の「束」として捉えることにより、語の意義をより明確に把握し、いわゆる「語感」の問題として終わらせてしまわずに、その違いをよりの確に認識することが可能となる(注2)。

こうした「意味の差」に意識的になることは、語の意味理解の深化や語彙体系の理解だけでなく、学習場面での言語活動にもつながりを開くことになる。例えば、語種の学習において、「調べる・調査・リサーチ」のような似た意味を持つ語が「微妙な感じの違い」

を表現することを理解したり、児童生徒が自分で書いた文章の推敲をするときに、文脈等から考えて、近い意味を持つ語の中からより適切な語を選択したりすることは、類義語の学習が言語活動につながる例である。

また、このような意味の差に意識的になることは、表現に関わる重要な観点の一つである「相手や内容に応じたスタイルを選択すること」にもつながっていく。例えば、議事録などを書く際に、

(例) 会議で反対意見を()。

の()に入る表現として「言った」と「述べた」のいずれが適切か。あるいは、レポートを書く際に、

(例) ①やっぱ、自然を大切にしなくちゃって思う。
②やはり、自然を大切にしなければ

ならないと考える。

のどちらがふさわしいのか。さらには、例えば発表会の招待状を地域の方に出す際に、

(例) ①ぜひいらしてください。

②ぜひいらしてください。

のどちらを選ぶのか。といったことは、相手の違いや文章の種類・文体に応じた語句を選択しようとする意識が働いているものと解釈できる。話しことばと書きことばの違いや、小説、レポート、手紙などといった文章の種

類の違い、さらには相手による違いを理解し、内容や相手に応じたスタイルを選択する力を伸ばすための指導の手がかりの一つとして、語の意味の差を意識化させる語句・語彙学習に注目することができるだろう。

語の意味を理解する際に、例えば『のどか』は『のんびり』と同じような意味である」といった、既知の語への「言い換え」で終わらせてしまつては、意味理解の深化にはつながらない(注3)。しかし、「相手に応じた語の選択」という観点から考えると、「言い換え」が重要となつてくる。「相手に応じた話し方」というと、教師が子どもが発達段階に応じた表現でやりとりを行う「ティーチャー・トーク」や、母語話者が非母語話者に対して行う「フォーリナー・トーク」(注4)などが想起されるが、その場合子どもは「合わせてもらう側」であることが多いかもしれない。しかし、一般のコミュニケーションにおいては「相手に応じた話し方」が重要になる。国語の学習においては、例えば「新入生に学校生活を紹介しよう」といった言語活動の際に、上級生にとっては当たり前に使う語が、新入生にとってわかりやすい語であるかどうかを考え、適切に語を選択する必要がある。ここでは、類義関係にある語群に注目することで、適切な語の選択が可能になるのである。

一方、言語の理解の面においても、「類義関係にある語の意味の差」に注目することにより、「文章・談話を批判的に解釈する」力につなげることが期待される。例えば、地球温暖化についての文章を読むときに、

(例) ①温暖化の影響で、穀物の収穫量が下がった。

②温暖化の影響で、穀物の収穫量が落ち込んだ。

のいずれの表現が用いられていても、「下がる」「落ち込む」は、ともに「収穫量の減少」を表現する語として共通する意味を有し、その語自体はいわゆる「難語句」ではないことから、受け手はその語に注目することなく読み過ごしてしまいがちである。しかし、実際には、「下がる」と「落ち込む」では「収穫量の減少」に対する印象が大きく異なる。つまり、受け手は無意識のうちにこの「印象」を受け取ってしまう可能性があるのである。このような場合にも、「類義関係にある語の意味の差」に意識的であれば、「表現者の意図」あるいは「表現者が無意識に選択した語であったとしても当該の表現が用いられることで結果として生ずる意味」を読み取ろうとする意識が働くであろう。このように、理解の面においても「類義表現の差」に意識的になることが様々な場面で有効なのである(注5)。

「フレーム」と表現・理解

次に、認知モデルの一種である「フレーム」の観点から、語彙指導と学習における言語活動との関わりについてみていきたい。

三省堂中学校国語教科書『現代の国語1』に掲載されている別役実の「空中ブランコ乗りのキキ」は、次のような文章で始まる。

そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんとといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

サーカスの、大テントの見上げるように高い所を、こちらのブランコからあちらのブランコへ、三回宙返りをしながらキキが飛ぶと、テントにぎっしりいっぱいのお客様は、いつも割れるような拍手をするのです。

この文章には一見して難語句は見あたらず、語句の面で解釈が困難になることはないように思われる。しかし、もし「サーカス」がどのようなものかを全く知らないという想定で、この文章を読んだらどうだろうか。一般的な語義としての意味をつなぎ合わせることで一応の解釈をしたとしても、なぜこの場に「大テント」が出てくるのか、また「こちらの

ブランコからあちらのブランコ」というのはどういう状況を指すのか、などの実質的な意味がわからず、文字面として一通りはわかるが、どうもイメージの湧きにくい文章になってしまうだろう。実は、こうした例と似た状況は、わたしたちが外国文学や古典の文章を読むときにも起こっているのである(注6)。

認知言語学の分野では、認知モデルの一種として「スキーマ」「フレーム」等と呼ばれるものがある。それは、複数の概念が構造を持って結びつけられたものであり、例えば「家」のフレームとしては「戸」「窓」「屋根」「扉」「部屋」などの概念が結びつけられており、「誕生パーティーへの招待」というフレームとしては、「ケーキとろうそく」「ごちそう」「ゲーム」「プレゼント」などの概念が結びつけられている。

(例) ①メアリは、ジャックの誕生パーティーに誘われました。

②彼は風が好きかしら、と、彼女は思いました。

において、①②をひとまとまりの連続した談話としてみた場合、「風」を「ジャックへのプレゼント」と解釈するのは、「誕生パーティーへの招待」というフレームが活性化されるためだと考えられる。つまり、私たちが言語で表現されたものを理解するときには、語の表

す概念の関連性―フレームを利用して効率的に解釈していると考えられるのである(注7)。これらより、語句・語彙の学習においては、語を把握する際のフレームの重要性を指摘することができる。「過去の経験や教養や現在の精神の志向性のすべては語いに関係」するという認識(注8)は、経験や知識がフレームを身に付けていくことにおいて重要な役割を果たしていると考えることによるものである。国語教育における「意味マップ」(注9)の活用は、このような観点から捉えることが可能だと思われる。

言語活動とのつながりを意識した学習

以上、語句・語彙の学習内容と実際の言語活動との関係について、類義関係とフレームを例に考えてきたが、実際に語句・語彙の習得は、日常生活における言語活動と密接に関連しているといえる。次期学習指導要領(注10)の方針を示す「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(平成二十年一月十七日、中央教育審議会)においても、現行の学習指導要領で「言語事項」に位置付けられていた「語彙」について、「発音・発声、文字、表記、語彙、文及び文章の構成、言葉遣い、書写などについては、実際の言語活動

において有機的にはたらくよう、関連する領域の内容に位置付けるとともに、必要に応じてまとめて取り上げるようにする」(P76)とされるように、語句・語彙の学習は、今後これまで以上に、実際の言語生活における言語活動との関係が問われるようになるだろう。学習内容と実際の言語活動とのつながりを具体的に示し、それを意識化させることによって、学習者は語句・語彙の学習を必要なものとして認識し、積極的に学習に取り組むことができる。そしてそのことは、語句・語彙の学習を基盤とした国語力の総合的な向上にも結びついていくものと考えられる。

- 注
- 1 宮島達夫(一九六〇)「語い教育の諸問題」『教育』一三三号、柴田武(一九六五)「語彙指導への提言―関連語句と意味的分析―」『高校国語教育』五号、渡辺実(一九七〇)「語彙教育の体系と方法」『講座正しい日本語 第4巻 語彙編』(明治書院)等。
 - 2 渡辺実(一九七〇)。
 - 3 興水実(一九六六)「語句指導の改造」『教育科学国語教育』九七号等。
 - 4 橋内武(一九九九)「アコモデーション理論」『ディコース 談話の織りなす世界』(くろしお出版)。

- 5 ある言語の文法現象や語彙が談話の中でどのような役割を果たすのかを研究した文献に泉子・K・メイナード(二〇〇四)『談話言語学』(くろしお出版)がある。また、談話に含まれる潜在的な意味を読み取り、談話に隠された権力性を問題とする研究に「クリティカル・ディコース分析」がある。泉子・K・メイナード(一九九七)『談話分析の可能性』(くろしお出版)等を参照されたい。
 - 6 英語の読解に関する指摘については、谷口賢一郎(一九九二)『英語のニューリーディング』(大修館書店)等を参照されたい。
 - 7 金水敏(二〇〇〇)「世界の認識と意味」金水敏・今仁生美(二〇〇〇)『現代言語学入門4 意味と文脈』(岩波書店)。例文も同。なおパーティフレームについては、マーヴィン・ミンスキー/安西祐一郎訳(一九九〇)『心の社会』(産業図書)に基づく。
 - 8 倉沢栄吉(一九七四)「語い指導の意義と方法」倉沢栄吉編『国語教育の実践的課題 語句指導と語い指導』(明治図書)。
 - 9 塚田泰彦・池上幸治(一九九八)『語彙指導の革新と実践的課題』(明治図書)。
 - 10 二〇〇八年二月現在。
- あべ ともよ 千葉大学教育学部准教授。専門は日本語学。日本語文法論に関する研究とともに、国語科における言語事項の教育にも関心を持ち研究を行っている。